

面倒な本の買い方

コッコ文庫

面倒な本の買い方

いらっしやいませ

コッコ文庫へようこそ。

当店は在庫を持たずに本を売る、書店とも出版社とも言い難い、ちょっと変わった店です。ここではあなたが求めないかぎり、物語は生まれません。

はじめにお伝えしておきます。当店で本を買うのは少々面倒です。依頼してみようかと思つたが最後、あなたは「フォームを送信しろ」「手紙を書け」「テイストを選べ」と言われます。それでいて、「今回のご依頼はお引き受けできません」と断られる可能性があります。そう、ここではお客様も店も面倒事に巻き込まれるのです。

だからといって、お客様を篩にかけるとか、店のこだわりを強いるとか、そうしたことは一切ありません。そこで誤解を招かぬようにと自己紹介も兼ねてこのエッセイを書きました。

コッコ文庫では、小説のオーダーを承ります。ただし、オリジナルティや唯一無二ということとより大切にしていることがあります。それは、作り手と読み手が対等であるということです。これは私が小学生の頃、ふと本屋の片隅で抱いた「なんで本屋さん——正しくは出版社——は、私が読みたい本がどんな本なのかを私に聞かずにつくっているんだろう？」という何気ない疑問に端を発します。

だから当店ではあなた自身が物語の原点となり、当店の依頼するだけの価値があるのかを判断し、あなたが読みたい物語を当店の伝える必要があります。この店に口コミはありません。

あるのは、互いの直感、判断力、そして審美眼だけ。自分が求める物語を評判もない作家に依頼するのは一種の賭け。それもまた一興。互いに納得できる売買を目指して、あなたはコック文庫を、店はあなたを判断する。

コック文庫はそんな面倒な店です。

面倒好きの方がどれくらいいらっしゃるかは分かりませんが、こんな辺鄙なところまでわざわざ足を運んでくださったのです。依頼する、しないに関係なく、ぜひ店内を自由に探索してみてください。というわけで、ここで店全体をご案内いたしましょう。

当店は本館と別館に別れており、本館では小説を、別館ではビジネスライティングを引き受けています。

このエッセイが属している本館は、次の六つのエリアに分かれています。

- ① コック文庫の特徴
- ② ご注文の流れ
- ③ 価格とお支払い方法
- ④ このエッセイ『面倒な本の買い方』
- ⑤ 小説三篇（『双子の糸の物語』『origin』 甲／乙）
- ⑥ よくある質問

依頼をご検討中の方は、④注文の流れや⑤料金といった基本情報だけでなく、このエッセイや③小説三篇を必ずお読みください。読まずに依頼するのは危険です。必ずご一読いただき、ご自身と当店との相性をお確かめください。

ちなみに別館には、左の四つのエリアがあり、それぞれ異なる分野のサンプル資料を揃えています。

①専門的な内容を身近に（法律―遺留分、病氣―群発頭痛）
②抽象的、感覚的なことを表現する（アートを飾る）

④企業向けマニュアルの作成（SNSの運用ルール、社内マニュアル）
もしビジネス関係のライティングもご検討中の場合には、相談や見積だけでもどうぞお気軽にお問合せください。

また、本館と別館の間には「中庭」と称するブログがあります。店主が気になったことをなんとなく書きとめる息抜きのためのスペースです。本以外の話題も多く、いろんな角度からどんな店なのか感じとっていただけるかもしれません。

それでは、長い自己紹介をはじめましょうか。

このエッセイを読み終えたとき、面倒な本の買い方を「面白い本の買い方」と感じてくれる方が一人でもおられたら、これほど嬉しいことはありません。

目次

四	三	二	一
コ コ	○ま ○る ○ま ○る	煌 ^{キラ} 々 ^{キラ}	ぞ く ぞ く
59	43	26	7

目次

面倒その1 手紙を送る	20
-------------	----

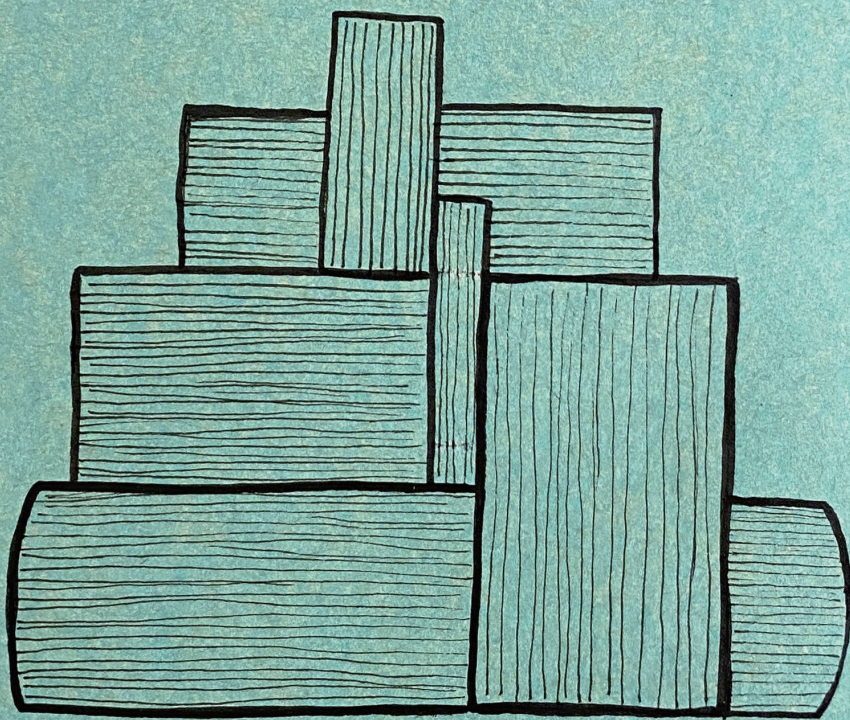
面倒その2 テイストを選ぶ	38
---------------	----

コッコ文庫の製本・装幀	51
-------------	----

コッコ文庫の価格設定	53
------------	----

面倒その3 ご相談	55
-----------	----

コッコ文庫と AI	57
-----------	----



私は一九八〇年代の半ば、当時人口約三〇万人を抱える地方都市に生まれた。覚えているだけで街には七つの書店があった。そのうち頻繁に通ったのが二軒で、うち一つが子供の足でも家から十分とかわらないところにあった。

幼い私にとって、そこはまぎれもない遊び場だった。当時はファミコンが誕生したばかり。テレビのチャンネル権は父親が握っていた。私の遊びといえば、ままごと、人形遊び、絵を描く、本を読む、のどれか。外に出て追いかけることというタイプではなかったから、今ならゲームやスマホに夢中で、画面をタップして本を読むのかもしれない。けれど、もし、私が今の時代に生まれても、そこへ通うだろう特別な理由があつた本屋にはあつた。

目をつぶっていてもそこにたどり着ける。なぜなら、おいをたどればよいから。すこし焦げた飴色のソースと、肉にピリッとアクセントを加える微塵切りのタマネギ、それを包み込むほわっと甘いパン。本屋に入つてすぐ左手にある平積み雑誌の手に取ると、紙袋のカサカサという音を連れて、ハンバーガーとポテトのにおいが漂ってくる。その本屋はハンバーガーショップと隣り合っていて、店内で行き来できるようになっていた。

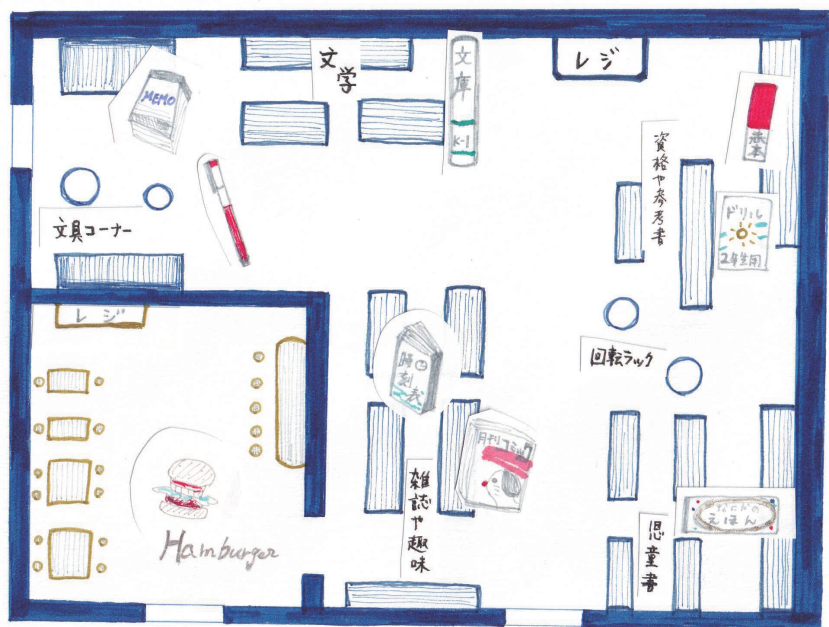
本とハンバーガー、どちらが優位だったかと聞かれたらそれは間違いなく本だった。それぞれの店の出入口があつたが、出入りしたのは断然、書店側の方が多かった。もしかすると、ハンバーガーショップだけを訪れたことはなかったかもしれない。それくらい私は本と本屋が好きだった。とはいえ、一番はハンバーガーが出来上がるのを待っている間に本を探すこと。

好きなものを待つ時間をほかの好きなもので満たす。これ以上の幸せがあるだろうか。雑誌コーナーでうろちよろしているとき、フライドポテトのにおいに誘われたし、持ち帰りのハンバーガーが出来上がるのを待つときは、本が待つ棚へと急いだ。高いから買ってもらえない仕掛け絵本をのぞく。それから家にあるはずの『わかったさん』シリーズを取り出して、見返しに描かれている地図を見る。地図を見ながらストーリーを思い出して、書かれていない「つづき」のなかでハンバーガーの出来上がりを待った。

このとき習慣になったのだろうか。読書といえば喫茶店をイメージする人が多いと思うが、私は喫茶店で読書しない。かと言ってポテトをつまみながらもしない。しないというか、できない。二つの店を行き来するうちに、読むときは読む、食えるときは食えるという癖がついてしまったらしい。だから、ながら読みが苦手なばかりか、喫茶店でもハンバーガーショップでも、買ったばかりの本がバッグに潜んでいる日は、食べ終えたあと長居できない。読むためには家に帰るしかないのだ。一度開いても、出し惜しみするようにすぐにバッグに戻してしまう。今でこそ、手早く用事を済ませて家に帰ろうとただせっかちなだけなのだが、子供の頃は一度物語のなかへ入り込んでしまうと抜け出すことができなかった。

と、書いていて気がついたのだが、コック文庫は、本館と別館に分かれている。もしかするとこの原点は、あの書店とハンバーガーショップにあるのかもしれない。

私が足繁く通っていた一九九〇年代前半、店のレイアウトはほとんど変わることがなかった。



それだけ出版業界は安定していたのだろう。当時のレイアウトはこんな感じだった。

書店の入り口は二箇所。正面玄関は大きな通りに面していて、入って右手が児童書、左手には雑誌コーナー。そこが隣のハンバーガーショップと通じていた。やや右寄りの中央奥にレジがあつて、その右側は参考書や実用書、左側にはずらりと単行本や文庫本、コミックが並び、裏口近くは文房具コーナーになっていた。

迷うことなく店内図が描けたものの、もう二〇年以上前の記憶が頼りだ。私だけでは怪しいからと家族にこのイラストを見せたところ、意外にも、それぞれが覚えてるレイアウトはこの図とさほど変わらなかった。

店に通い始めた当初、私はいつも児童書コーナーにいた。絵本からはじまり、お次は右ページに文章で左に絵が配置された童話シリーズ。なぞなぞ本。『ミイラのラムさん』シリーズ。そのうち子供向けの文庫本を読むようになり、『クレヨン王国』シリーズにはまった。最初に買ったのは『クレヨン王国の白いなぎさ』。あらすじにある「清少納言」が気になった。ほかにもファッションや心理テスト、星占いを特集したちよっとおしゃまな本も好きだった。目のなかに星がある女の子が表紙のハードカバーで、中のイラストも絶妙にレトロだった。各星座に似合うヘアスタイルやファッションまで紹介されていた。調べたところ、『小学館ミニレディー百科シリーズ』というものらしい。「ミニレディー」はシールやノートもお好きで、文房具コーナーにもよく現れた。小学生になると、毎月、真っ先に漫画雑誌を手にとるようになった。私が『りぼん』を買ったのは、『ちびまる子ちゃん』が連載をスタートさせた号だった。

人見知りで恥ずかしがり屋の私だったが、本の世界と仲良くなるのは得意だった。誰に對し

でも自己主張を躊躇う人間だったのに、欲しい本を伝えることは苦ではなかったらしい。本（ただし仕掛け本以外）だけは、欲しいものを手に入れていた。きっと、ぐずぐずしていられないほどたくさんの方が待ち構えていたからだろう。迷ったり、躊躇したりしている暇などなかった。開くと音が鳴ってオバケが飛び出す本が並び、古今東西のおとぎ話が収められた回転するくるくるラックがあつて、向こう側が見えない高い書棚で隔てられている本屋は、幼い私にとってはさながらテーマパークだった。

その後、私は親の転勤で生まれた街を離れた。転居先の大きな都市には、大小多くの書店があり、新しい出会いが待ち受けていた。

小学四、五年生だったと思う。当時の私は学芸会好きが高じて舞台に興味を抱いていた。たまに衛星放送で流れる宝塚歌劇の舞台を録画して、男役に憧れていた。

ある日、大型書店を彷徨っていたときのことだ。気がつくともれまで足を踏み入れたことのないエリアに迷い込んでいた。「歌」と「劇」という直球なタイトルの本が目にとまった。宝塚歌劇の雑誌『歌劇』だった。隣には『宝塚 GRAPH』があつた。宝塚の本があると驚いた私は、おそろのおそろの表紙を捲った。完璧なまでに艶々のオールバック。切れ長のアイライン。ハクビシン並みのノーズシャドウ。頬にそっと置かれた、思わせぶりの造作の手指。VHSの粗い映像ではなく、ドアップの写真から放たれるトップスターの圧は凄まじく、私は一気に目くるめく世界にのめり込んだ。私は数か月、雑誌を買い続けることになる。

小学生にとってこの雑誌二冊は大きな出費だった。今度は宝塚まで観劇しに行くと言い

出すのではと、もしかすると母は内心冷やひやしていたかもしれない。

ところが、組やトップスター、作品、衣装と次々と情報が飛び込んでくるとこのに舞台を観たいという気持ちはそれほど高まらなかった。それもそのはず、興味の対象が舞台から別のものへと移ってしまったのだ。それまで親しんだ「物語」とも「伝記」とも「漫画」とも違う、現実の情報が文字と写真で構成され、ぎゅっと詰まっている「雑誌」という本の形態、私はそれに夢中になった。『ミニレディー百科』の進化形と言っても過言ではない。

こうして雑誌の時代が始まった。以降私は、音楽雑誌、漫画雑誌、ファッション誌、サブカル誌と渡り歩くことになる。

九〇年代、雑誌の勢いは凄かった。どのジャンルでも次々と新しい雑誌が創刊され、ファッションと一口に言っても、ギャル、コンサバ、モード系と、どの雑誌を読むか迷うほど選択肢があった。音楽もバンドブーム、ヴィジュアル系、某ファミリーの全盛期。好きなバンドが集められたら片っ端から立ち読みし、写真写りが良く、かつインタビュースが長い雑誌を選んで買った。

次第に、音楽はこれ、ファッションならこれ、とお気に入りの雑誌が見つかった。同じようなテイストのファッションを取り上げていても、モデルの雰囲気や連載コラムが好みじゃないこともあったし、違うジャンルの雑誌なのにとこか似たものを感じることもあった。そこで意識し始めたのが出版社だった。もしかすると、私が「会社」という言葉に具体的な商売を結びつけてイメージしたのは、出版社が最初だったかもしれない。

私は持っている本の奥付を開き、裏表紙を見返し、出版社をチェックするようになった。同じ出版社のファッション誌であれば男性誌と女性誌に共通するスタイルを感じるがあった。サブカルチャーや音楽はそれぞれに特化した出版社が強いと知った。たまに家に置いてある週刊誌を出している出版社からは、当時私が読みたいと思う雑誌は出版されていないと知った。自分なりに出版社を分類するうち、表紙を見てどの出版社かあてられるようになった。

実は雑誌に夢中だった一〇代の一時期、物語をほとんど読まなくなっていた。児童書コーナーの次、どの棚へ向かってよいのかわからなくなってしまったのだ。特に小学校六年から中学一の途中までは、読みたいと思う物語が思うように見つからなかった。音楽を聴いてファッション誌を眺めて、気まぐれに『エルマーのぼうけん』を開いてみる。相変わらず面白いけれど、「もっと文章が欲しい」と思った。それに、自分でつづきを想像してみると、登場するのは、竜や色々な動物たちではなく、こどものエルマーでもなく、自分でつくりあげた一癖ありそうな人間ばかりだった。だからと言って、『痴人の愛』に手を出してしまっただけは、後戻りできなくなるような気がして我慢に我慢を重ねた。

でも本当は物語を欲している。そこで登場したのがラフィク・シャミだった。シリアからドイツへ亡命したというこの作家は、人間の欲深さや業をおとぎ話のように、それもしつこく描くので、思春期からの過渡期にいる私には最適の読み物になった。

シャミを皮切りに、読み終えたとまた一冊、また一冊と求め、気がつくと、再び物語の世界に夢中になっていた。

これには時代の流れも影響していたように思う。好きだったバンドの曲調が変化し、別のバンドは活動を休止した。バンドとファミリィに代わって、女性シンガーソングライターが台頭し、リズムや音色重視の私が、思わず歌詞に耳を澄ましてしまう歌い手たちが登場した。そんなことも重なったのか、特に日本文学と距離が縮まったのだと思う。

あの頃は、本屋へ行く度に続々と読みたい本が見つかった。次に読む本のリスト、その最後尾がどこにあるのか見当もつかなかった。だから専ら手頃な文庫本を読んだ。場合によっては三百円台で名文を味わえた。太宰、漱石、江國香織、銀色夏生、綾辻行人、乃南アサ、辻仁成、重松清、谷崎潤一郎。あつという間に読み終わっても、右手には次の本が控えていた。

当時思い知ったのは、文庫本コーナーの奥深さだった。単純に他のコーナーより広いのだ。大きな書店であれば文庫本だけで何列もの書棚があり、小さい店でも、出版社あるいは作家別に分類されていることが多い。しかも雑誌と違って書棚の背が高く、余すところなく本が詰め込まれている。それでいて新作、話題作の平積みスペースもある。

私は文庫本を通して、更に出版社のカラーを知ることになった。それは社風でもあり、字面通りの色カラーでもある。

たとえば出版社がどこなのか書かれていなくとも、文庫本は背表紙の色や、全体のデザインで、どこの出版社の本なのかをある程度判断できる。本好き、書店好きの人にはおわかりいただけるだろう。

単行本がその本の世界観をカバー、背表紙、帯と全体の装丁でもってたっぷりと表現するの

に対し、文庫本は単行本の発売後により多くの人に気軽に読んでもらおうとする廉価版なので、出版社や文庫本のシリーズごとに一定のデザインがある。作品を全面に押し出している単行本に対して、文庫本は作品の隣に出版社がぬうっと顔を出しているのだ。

文庫本の売りは、古典文学からベストセラー、絶版本の復刊までという幅広いラインナップと手軽さ。出版社を問わず、多くはA6サイズで携帯もしやすい。

また、海外作品の場合、一つの小説が複数の出版社から発行されることがあるのも文庫本の特徴だ。例えばドストエフスキの『罪と罰』は異なる出版社から、異なる翻訳版を購入できるから面白い。底本が違う場合もある。しかし読者のなかには、翻訳の差異を気にしない人もいる。そうすると、AとBどちらの出版社の本なのかという視点で選ぶ人も出て来る。そんな訳で、手頃なわりに社を背負っているとも言えるのが文庫本だ。

コック文庫という辺鄙な店までたどり着いたあなただ。頭にはすでに浮かんでいるだろう。新潮文庫の背表紙は、太宰が黒、三島は橙、ヘミングウェイとドストエフスキはどちらも青だが、同じ青ではない。岩波文庫はジャンルで色が分かれているから、フォークナーはピンクだし、『新古今和歌集』なら黄色。光文社古典新訳文庫は作家の国・地域別のカラーリング。ちくま文庫はクリーム色で上部にオレンジの線が引かれ、講談社文芸文庫の背表紙は作品ごとに異なったグラデーションカラー。

ほかにも、現代作家の出版傾向など、文庫本の話は尽きないがこの辺でストップしよう。

こうして文庫本の奥深さは、私を更に本、そして物語の世界へと導いた。書店で文庫本の棚に挟まれていると、一体自分がどこにいるのか、何時なのかわからなくなることがあった。本は一見すると行儀よく並んでいる。が、実際は書かれた時代も国も、元の言語もてんでバラバラで、ページを捲られてはじめて本性を現すところでもない曲者だ。友情、愛憎、戦争、絶望、変態の類……。新しい物語を捲る度にぞくぞくとした。

かつてテーマパークにも等しい遊び場だった書店は、十七歳になった私にとって、静かで、四角四面を装った、禁断の場所になっていた。まだ知らぬ感情を知ったかぶりできる場所。危険な、妖しい世界を覗ける場所。店の大きい、小さいなんて関係なかった。どこでも読みたい本が続々と見つかった。

けれど小学生の時ふと抱いた疑問は常に消えなかった。

(どうして出版社は読者の気持を聞かずに本をつくっているのか?)

それは、自分で書くことも、読者アンケートを送付しようとも解決しないもっと大きな疑問だった。

*

ところで、コック文庫も「文庫」だ。

屋号を決める際、「出版」「編集室」「書房」「書肆」など考えてみたが、どれもしっくりこなかった。

コッコ文庫のメンバーは私だけ。執筆から事務作業まで、すべてをひとりで対応している。「編集」という言葉では限定的だし、「書店」と掲げるには本がない。なにしろ在庫はゼロ。もう少しコンパクトで、でも、いかにも本という感じがして、ありきたりな言葉はないだろうか。

「コッコ」が先に決まっていたのでそれに馴染む必要もあった。「コッコ」の由来はまたの機会に譲るとして、「手文庫」という言葉をご存知だろうか。掌大の箱のことだ。私がつくる本は上製本ではない。その代わりに、ちょっとした箱におさめて届けることに決めていた。手文庫に本を仕舞う、そんなコンセプトを店名にと考えたが、手文庫は漆器や装飾を施された高級な箱を指すので、そのままでは不相応だ。

けれどひとたび、「手文庫、文庫、コッコと文庫。コッコ文庫」と呟いたところ、「コッコ文庫」以外の屋号は考えられなくなった。在庫ゼロでも、空想上の庫にはたくさんのお話が仕舞われているイメージも好いと思った。

手紙を送る

あなたが最後に手紙を書いたのはいつですか？

基本メールだし、郵便代も上がり続けるし、手紙を送るという発想がそもそもない。そんな方が多いと思います。でも、コッコ文庫へ注文したいと思ったそこのあなた、久々に手紙を書くことになるかもしれませんよ。

I 「興味ある」「依頼してみようかな」そんな方は、まず初回お問い合わせフォームを送信してください。

お名前、希望する物語、希望納期、ご自身用／贈り物など、フォームに沿って入力いただきます。

II フォームが届き次第、あなたがお求めの物語を当店で「引き受けられる可能性がある」か、「お引き受けできない」かを判断します。

と申しますのも、当店ではいくつかのルールを設けています。

例えば二次創作にあたる内容や、誰かを誹謗中傷する目的のご依頼は受け付けません。結末の指定もできません。また、希望納期に間に合うかの確認も必要です。

この確認作業を当店では「確認その1」と呼んでいます。

「確認その1」の結果は、初回お問合せフォームの受信後、10日以内にメールでご連絡いたします。

残念ながら「お引き受けできない」と判断した場合はメールでご連絡いたします。

Ⅲ 「引き受けられる可能性がある」と判断した場合、当店からお客さまへある住所が記されたメールをお送りします。メール受信後2週間以内にその住所宛てにお手紙をお送りください。

もちろん宛先はコッコ文庫です。どんな物語を読みたいのか、依頼した背景、タイトルに入れて欲しい言葉など、フォームでは伝えきれなかったことを自由に綴ってください。

手書き、印刷どちらもOKです。ただし、AIは使わずに。

便箋は5枚以内が目安です。

また、恐れ入りますが郵便代はご負担をお願いしております。

コッコ文庫が住所記載のメールを送信してから、あなたからの手紙が届かないまま3週間が経過した時点で、お問合せはキャンセルと判断いたします。何らかの事情で手紙を送るまで時間がかかるという場合は、必ずメールでご連絡ください。

さて、ここでご注意いただきたいことがあります。手紙を送ることは、正式に注文することではありません。あなたからお手紙が届いたら、コッコ文庫でご希望の本を「制作できる」のか、「制作できない」のか、最終的な判断をします。これが「確認その2」です。つまり、せっかくお手紙を送っていただいたのに、ご注文には至らないケースもあるということです。

なんだか面倒になってきました。

「興味を持ったのに、断られるなんてどういうこと?」と思われるかもしれませんが、あなたが注文し、コッコ文庫がそれを受注することは、互いにお金や時間、気持という貴重なものを差し出すことに他なりません。コッコ文庫はお手紙を通して、あなたの期待に応えられるか、字数制限内に収まるか、こちらの技量や分量と価格が適切であるかといった様々なことを考慮し、慎重に判断します。これは決して「この話は書きたくない」とか「こんな依頼じゃ面白くない」と、あなたが求めている物語を評価したり否定するものではありません。

その点はどうぞ安心して、お手紙を送ってください。

IV 「確認その2」が終わったら、今度はコッコ文庫からあなたへ手紙を送ります。あなたのお手紙が届いてから2週間以内に発送します。

「制作できない」と判断した場合は、手紙で理由をお伝えします。

一方、「制作できる」場合は、二部構成の手紙をお送りします。

1. 小説の概要（ざっくりとした構成）
2. 見積書（正式な価格、予想納期等を記載）

※当店からあなたへの質問がある場合もあります。

V 当店から「制作できます!」という手紙が届いた方は、受け取り後10日以内にメールで、注文する／しないをお知らせください。

このメールが正式な注文となります。

小説の概要、納期や価格、手紙から感じる雰囲気を頼りに、コッコ文庫に依頼するだけの価値があるのかどうか、判断してください。

コッコ文庫があなたのお手紙を読んで「制作できない」と判断する場合がありますように、当店から「執筆可能です」と返事が届いても、あなたが「ちがう」と感じたならば、「依頼するのは止そう」とご判断ください。

なお、コッコ文庫からの手紙があなたに到着してから2週間を過ぎても一切のご連絡がない場合には、ご注文なさらないものと判断いたします。

また注文依頼は手紙ではなく、メールでお願いいたします。

Ⅵ ご注文いただいたお客様へは「受注完了兼お支払いのお願い」というメールをお送りします。メール受信後10日以内に、メール記載の方法でお支払いをお願いいたします(支払方法の詳細はこちら)。着金が確認でき次第、執筆にとりかかる旨のメールとアンケートをお送りいたします。

Ⅶ 以後、完成、発送など、状況は随時メールでお知らせします。
本が届くまで、通常4、5ヶ月ほどお待ちください。

以上が手紙のやりとりも含めた、コッコ文庫への初回問い合わせフォームの送信から本が届くまでの流れです。

いかがですか？ 一度フォームに入力した内容を、あらためて手紙にしたため、自己負担で郵送するだなんて、面倒ではありませんか？ しかも2回もチェックされる。「注文する側なのに品定めされているようで不快」というご意見もあると思います。そうです。まさに品定め。ただし逆。あなたにコッコ文庫を見極めて欲しくて、こうした面倒な注文方法にしています。

コッコ文庫には口コミがありません。WEB サイトにも「某氏、推薦」のようなコメントはなく、掲載する予定也没有ありません。最近オープン型のレビューサイトなどもありますが、評価の高低を問わず、口コミを書き込むことはお控えください。なぜなら、10 人の「あなた」がいるとしたら、10 の審美眼でコッコ文庫を判断してほしいからです。コッコ文庫へ依頼するかどうか、その判断材料はこのサイトにある情報のみ。あるいは、それに加えて手紙のやり取りしかありません。重要なのは誰かではなくあなたが判断することです。

あなたは果たしてこの店を信頼できますか？ 文庫本の巻末にある既刊本一覧だけを頼りに次に読む本に狙いを定める、あの感じを思い出してください。

判断されるのはコッコ文庫だけではありません。私はあなたを誠実な依頼主として信頼できるのだろうか。誰かを傷つけるために物語を依頼してはいないだろうか。注文をして支払わないことはないだろうか。そうしたことを、どんな物語がいいかな？ と想像する、頭の片隅で考えます。

直接顔を合わせて売買するわけではないからこそ、お互いを知り、納得したうえで話を進めましょう。互いを知るためには、手紙という、距離と時間が伴う、静かだけれど手間がかかる方法が適しているとコッコ文庫は考えます。

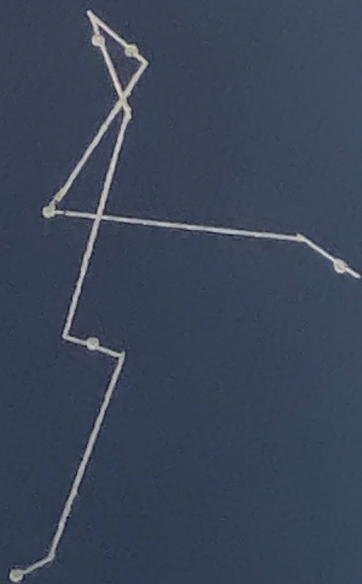
本そのものは「お似合いです」や「一点もの」という押しつけがましさを撥ね退けるための言葉を持ちません。突っぱねられるのはあなたです。「一期一会」とか「オリジナル」なんて言葉に惑わされずに、当店を判断してください。D2C（Direct To Customer：店と客と買が直接やりとりする）ビジネスだからこそ、口コミに左右されるのはつまらない。

「どう手紙を書いたらよいのかわからない」

そんな声もあるだろうと予想しています。最初は手紙のサンプルを掲載しようかと考えましたが、それがあるときっと引き摺られる方が出てきて、自由ではなくなってしまう。自由とは結構面倒なものです。

どんな物語が届くのか、読み始めるまで分かりません。一冊の本の誕生をめぐって手紙という古風な方法でやりとりする。面倒だけれど、なんだか面白くなりそうな気がしませんか？

二
煌
々



三月

LIBRO



あなたにとって「最高の買い物」を思い出してほしい。

長年憧れようやく手に入れた逸品でも、思わずその場でかぶりついた屋台飯でも、「最高」はどんなことでも構わない。ただし、ネットではなくリアルな店での買い物に限定する。となると、それはいつのことだろう。

二十一世紀に突入しても、雑誌は相変わらず勢いがあり、私の文庫本熱も継続していた。サッカーの日韓W杯を機にスポーツ雑誌にも手を染め、新潮社のYondai?グッズに応募しては、マグカップ、ブックカバーなどを手に入れていた。

二〇〇〇年代はじめの約十五年間はITバブル崩壊で景気は後退、世界ではテロに戦争と、俯瞰すると決して安定していた時代ではないのだが、今と比べるとキラキラしていたと思う。本も含め「物を買う楽しさ」に価値があり、最後の輝きを放っていたのがこの時代だった。私は大学生となり、読書の幅は広がっていたが、本と同じくらいファッションにも夢中だった。

それが最高潮に達した二〇一三年、二十代最後の年に私は最高の買い物をすることになる。舞台は新宿伊勢丹。つまり、私の最高の買い物は本ではなかった。

ファッションやコスメの聖地であるこの新宿伊勢丹に初めて足を踏み入れたのは大学生の頃。当時は海外のデニムブランドが次々と上陸していた。セータープレスやヒップポケットのデザインが各ブランドのアイコンで、やや遅れてスキニーが全盛期を迎え、一方で控えめなヴィンテージ加工が秀逸な日本ブランドのデニムも登場した。

「アイコン」と聞くと今ではSNSのそれにとって代わられ、誰でも簡単に自分のアイコンをつくらることができる。でも当時「アイコン」を手に入れるためには、自分よりすこし高いところへ手を伸ばす必要があった。あの頃、「そのうち君自身がアイコンになるのだよ」なんて言われても、信じられなかっただろう。アイコンの語源のアイコンも同じ経験をしたのだろう。

当時はセレクトショップが魅力的な時代でもあった。モード、フレンチシック、アメカジとショップの棲み分けができていて、ショップのなかでもカジュアル、トラッドなど複数のジャンルでブランドが展開していた。トレンドはいつだって世界観を携えていた。「もしこの服に身を包んだら……」と夢を見たし、身の丈に合わない物に憧れ、ヒールの靴を我慢して履いても痛くなんてなかった。

けれど夢は夢。学生の私が新宿伊勢丹で頻繁に買い物できるはずもなく、ショーウィンドウに見つけた丈の短いトレンチコートを真似て手持ちのコートを切り、裾の始末をしないのがモードなのだと、若気の至りで何も買えずに店を歩いた。裾がほつれたトレンチコートにどんなボトムスと靴を選ぶのか。選ぶこと、組み合わせること、そうしてひとつの雰囲気の日替わりで作り上げることが楽しかった。

そうしたアイディアは、もちろん店だけでなく雑誌からも盗んだ。雑誌の表紙はときに有名メゾンのミューズが飾った。時のデザイナーはラガーフェルド、ヴィクター&ロルフ、エディ・スリマン、アルベール・エルバス等々。「メゾン」に、「ミューズ」と、なんだか言葉もキラついていた。グッチ時代のトム・フォードは今より遥かに輝いていたと私は思う。

子供のとき、本屋の隣にあるのはハンバーガーだったが、それがファッションに変わった。紀伊国屋本店なら新宿伊勢丹、アート系なら地下のブックセンター@渋谷パルコ、京都四条通のジュンク堂なら藤井大丸と、書店とファッションはいつも一緒だった。

なかでも思い出深いのが池袋のリブロだ。

ゴールデンウィークのある夕方、当時新しい環境の只中にいた私は、これから誰と親しくなるのか、履修登録はあれでよかったのかと落ち着かなかった。次第に翳ってゆく部屋が嫌になつて外に出ると、空にはまだ茜色が残っていてほっとした。そのまま神田川に散る桜を眺めながらあてもなく道なりに進み、左手に見えてきたのがリブロだった。着いたときは夕闇になっていた。が、そんな不安は書店に入ってしまったえば消えてしまう。

当時、池袋の大型書店といえば、リブロとジュンク堂本店で、家から歩いて池袋に入ると先に姿を現すのはジュンク堂だったはずだ。ところが、そのとき目に入ったのはリブロだった

さすが東京の書店は大きいと店内をぐるぐるして、いつの間にか文庫本コーナーに落ち着いていた。ざわざわする気持ちを慣れ親しんだ文庫本で落ち着かせたかったのだらう。文庫本コーナーは、その並んだ背表紙だけを見ればどの書店も似たような景色だ。それが私の心をほっとさせる。

さて、その文庫本コーナーである一冊が目にとまった。

坂口安吾『墮落論』だった。すでに二十歳を過ぎていた私には、「墮落」という言葉はそれほど魅力的ではなくなっていた。が、平積みされているいくつもの表紙を眺めるうち、むくむく

と蘇ってくる安吾の記憶があった。

それは、小説から離れていた一時に読み耽っていた国語便覧だった。最近でこそ人気の国語便覧だが、当時は授業で使われることなどないに等しい、日陰の一教材に過ぎなかった。しかし私にとっては、実は雑誌よりも格上の存在だった。

国語便覧には文学の歴史、古今東西の物語、作家の色々が学校教材というだけあって実に淡々とまとめられている。代表作、受賞歴、白樺派に耽美派に新思潮派、タイトルは二文字が多く、次点で『○○の○○』、筆名と本名、初版本の装丁、作家の略歴とよくある末路。つまり私にとって国語便覧は、高尚なゴシップ誌にはかならなかった。

今のようにネットで情報を集められない時代、資料集という定義から外れないように書かれた記述はその硬直さゆえに、読み手の妄想を思う存分に掻き立てた。私の頭は、平井太郎に、元大蔵省、もらって嬉しいのは芥川賞じゃなくて読売文学賞、いや泉鏡花賞じゃない？ といった些末なデータでいっぱいだった。

だから、まだその文体を知らない安吾も、すでに私にとっては太宰の友人であり、サバイバーであり、桃屋の眼鏡のキャラクターを若干ピリッとさせた、乱雑な部屋で執筆していた、「よく知るあの」小説家だった。

しかし私は買うのを躊躇した。

私は坂口安吾の小説を好きだろうと直感していた。が、もしそうではなかったら……。想像ほど「無頼」ではなかったら……。三島、鏡花、阿部公房と、小学生の頃から密かに国語便覧

でチェックしていた作家にはあらかた手を出し、最後の一人が安吾だった。幸いにも誰にも裏切られていない。私は文庫本を前に緊張していた。

どれくらい逡巡したのだろう。結局、他の本にサンドしてレジに持って行ったのは『白痴』だった。もう二冊の本がなんだったのかは覚えていない。けれど、グラデーシヨンの表紙だった記憶があるので、うち一冊は講談社文芸文庫だったかもしれない。

やはり安吾は期待を裏切らなかった。

「おれのこと何も知らないくせに好きってなに？ 何を知ってるの？ どこが好きなの？」なんて野暮は言わなかった。口や手紙ではどうか知らないが、小説でそんな一文を書いたことは、安吾は人生で一度だってないのではないだろうか。『わたしは海を抱きしめていたい』に私は攫さらわれた。浮気性や肉慾が私に関係あるのかないのか、そんなことはどうでもよい。冒頭と、ラストの海岸での情景が、私を打ち砕いで自由にした。安吾の描く慾は透明で、自分の女性性が嫌いだっただけに、あの小説はそれまで知らなかった女性性を教えてくれた。

こうして私は安吾の世界をふらつくようになる。『桜の森の満開の下』『夜長姫と耳男』『Farceについて』と進み、車谷長吉、再び三島、ボルヘス、マルケス、ドストエフスキーと読書の快楽に身をまかせた。国書刊行会の分厚い単行本が入った袋を笑顔で抱え、友人に勧められた百鬼夜行シリーズも一気に読んだ。いくら読んでも足りなかった。

あの頃は新宿伊勢丹にいても、どの書店にいても、大学の図書館でも、冴えない部屋で読書していてもときめいた。

大学を卒業して自由にお金を使えるようになって、お気に入りの店で服や靴、なにより欲しいだけの本を買った。

ところがそうした日々は長くは続かない。

眩いものを見続けると疲れてしまうように、あるいは、輝きそのものも光を放ちつづけ疲弊したのだろうか……。服でも本でも、物を買うという行為に対する価値観が変わり始めた。それは自分に限ったことではなかった。好きな店がひとつ、またひとつと消えていった。

思い返してみると、私をはじめてユニクロで買い物したのは新宿伊勢丹へ足を踏み入れたのと同じ年だった。子供用Tシャツ（サイズ一六〇）を選ぶとききれいな目に着こなせて、しかも安いと知った。千円未満だったと思う。今ではよくある値段だが、当時は驚きの安さだった。二〇〇五年のことだ。

ファストファッションが普及し、一方でセレクトショップもまだ元気だったのが二〇一〇年頃まで。震災があり、それを乗り越えようと日本製のブランドが増え、多売ではなく必要とされるものをつくる・買うという落ち着いた傾向が見られるようになった。その前後からオーガニックコットンという言葉も妙に耳にするようになった。

「流行」は影を潜めた。これといった人気アイテムはなくなり、強いて挙げると、タイトな装いから、オーバーサイズファッションが主流になり、年齢、性別に関係なく革靴よりスニーカーを選ぶ人が増えた。私の買い物場はセレクトショップではなく、個人オーナーの店やブランドの受注会になっていた。けれどそれにはお金がかかり、ほんの一時の嗜みにすぎなかった。

知らぬ間に、時間は私たちの頭上にあつた煌めきを、ぼろ、ぼろっと剥がしていた。歩いていても、電車に乗っていても、まるで本の虫であるかのように下ばかり向いている。でも、本と違つてそれは発光している。ただし、煌めいてはいない。だつて多分、電車のなかで誰かの表情に、装いに、一目惚れなんてしないのだ。

私が新宿伊勢丹とユニクロを知つたその十年後の二〇一五年、安吾と出会つたリプロ池袋本店は閉店している。渋谷バルコのブックセンター、京都のジュンク堂や三月書房もはや存在せず、生まれ故郷の七つの書店は言うまでもない。

*

ところで、気になっている人はいるだろうか。私の最高の買い物のことだ。実はこの体験がココ文庫に影響している。

その日、私は新宿伊勢丹で香水を二本買うことにしていた。今と同じで、当時の新宿伊勢丹も本館とメンズ館でそれぞれ異なる香水ブランドを取り揃えていた。メンズ館だからといったくの男性向けというわけではなかったが、本館よりニッチなラインナップだった。

まずは本館とメンズ館を行き来し、先に本館で目ばしいものを二本見つけた。うちどちらか

全を買うことにし、もう一本は隣で選ぶとメンズ館へ向かった。当時のメンズ館の一階は今よりも立体的なレイアウトで、香水売り場は本館から向かうと右手の角にあり、香水が並ぶガラスケース越しに店員がいた。香水の色、瓶、ラベル、小さな説明書きを読んでいると、すべての香りを知りたくなる。が、結局試したのは三つだったか、四つだったか……。

対応してくれたのは三〇代と思しき男性店員だった。押しつけがましさも、紋切り型のセーリストークもないことにほっとして、彼から購入する香水はすぐに決まった。

すでに会計という段階で、店員との会話に臆してしまう私にしては珍しいことに、彼に次のような相談を持ちかけた。

今日はふたつの香水を買うつもりである。一本はあなたから購入するのだが、もうひとつは本館で購入予定で、候補は二つある。一つはウッド系、もう一つはローズ系。ローズと言っても華やかなものではなく、癖が強いローズでフラワーという括りには入らない。どちらも甘さはない。目の前にあるこれとの相性も兼ねて、どちらを買うのか悩んでいる、と。

ブランド名、商品名は伝えなかった。場面で使い分けるのか、誰かへの贈り物なのか、あるいは重ねづけするのか、二本の香水の目的も伝えなかった。抽象的過ぎる相談だった。

が、香りという目に見えない商品を扱う彼は得意とするところだったのだろう。この店員は私が伝えなかったことには触れず、それこそ香りという目に見えない、漠然とした質問をいくつかして「わたしなら」と想像して答えを出してくれた。けれど、香水を纏うのは彼自身ではなく客である私あるいはだれかと想像してくれているのが伝わってきた。

私が決めあぐねていた香水二本と、彼が思い描いた香水やストーリーはまったく違っていたかもしれないし、重なる部分があったかもしれない。しかしその正誤はどうでもよい。香りという抽象的で、人によって感じ方が大きく異なるものを曖昧で数少ない言葉を頼りに想像して提案し、相手の想像を信頼して物を買う。「見えないなにか」を想像して物を提案する、選ぶという体験が最高に面白かった。

このとき曖昧に、けれど強く感じたことがある。互いの想像はきつと違うのに、どこかで共通するなにかがある、ということだ。それはとても感覚的なよろこびで、物を手にしたそれ以上の満足感があつた。

大半の買い物をネットで済ませるようになった今、私はあれを越える買い物をすることはないかもしれない。物を買うという行為そのものに魅力を感じなくなった。けれど、コッコ文庫ならそんな面白さを提供できるかもしれない。本という物にも、物質としての手触り、重さ、内容だけでなくなにかがあると思っ

ている。あのとき買った二本の香水、その末路を問わず、私はコッコ文庫のなかにいまだそこはなかとなく漂う二つ香りを感じることがある。

テイストを選ぶ

香水、ファッション、音楽や料理と何事にもジャンルや系統があるように、小説も内容や文体で分類することができます。純文学やエンタメ、社会派ミステリー、SFなど多種多様。こうしたジャンルによって、私たちは読みたい本を見つけやすくなります。

では、コッコ文庫はどんなジャンルの小説を書くのでしょうか？

決まっています。決めるのはあなたです。

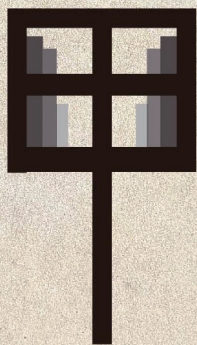
本来、小説は書き手の純粋な衝動から生まれます。が、コッコ文庫は違います。あなたなくして、小説は生まれません。ところが書くのはあなたではなく、結末を指定できるわけでもない。ここが複雑なところで、どんな物語を読みたいのか、あなたは当店へ思いを伝える必要があります。けれどこれって結構難しいことかもしれません。

たとえばあなたは「犬と猫が家出して、大冒険を経て家に戻ってくる話」を読みたいとします。きっとあなたのなかにはすでに、ファンタジー、SF、心温まるストーリーといったイメージがあるはずです。

あなたから「犬猫の冒険、不思議系でよろしく」とラフな注文があったとしましょう。コッコ文庫が書き始めることはできますが、果たしてこれであなたが読みたい物語が生まれるかといえば疑問です。

だからもう少し、あるいはもっとあなたの思いや要望を伝えていただかなくてはなりません。でも、どのようにして伝えたらよいのか悩むかもしれません。

そこで、コッコ文庫では次のページの2つのテイストをご用意しました。何から伝えたらよいかわからない方も、アイディアがフォームの欄外に溢れてしまう方も、注文時に必ずどちらかを選んでいただきます。



- ・クラシック
- ・落ち着き、均整
- ・会話文控えめ
- ・縦書き、縦置きイメージ
- ・インキの擦れ、日焼け、染み



- ・モダン
- ・遊び、捻じれ^{ノイズ}
- ・会話文普通～多め
- ・横書き、横置きイメージ
- ・用紙の破れ、濡れ、皺

これら2つのテイストは、ジャンルよりも手前にある漠然とした雰囲気と捉えてください。

甲乙で変わってくるのは、内容、文体、展開、モチーフや舞台、結末など多岐に渡ります。ある注文では結末だけが異なるかもしれません。別の注文では、結末は同じでもそこに至るまでの展開と視点（一人称／三人称）が違ふかもしれません。あくまでもテイストなので、細かな指定ができるというものではなく、甲乙どちらの雰囲気の物語にするかという選択です。

犬猫の冒険譚に話を戻して、あなたの選択が物語にどう影響するのか確認してみましょう。

私は三人称で書くことにしました。犬猫が二匹で散歩している情景からはじまり、猫が突然走りはじめた。さて、猫はどこへ行ったのか？

私がひとりで書く場合、私の頭に浮かんだ場所は植物園です。猫はまるで植物園に来たことがあるかのようにどこかを目指して進んでゆく……と、想像するのですが、そこであなたのお手紙を思い出し、時間を巻き戻します。すると、猫が向かった先は甲と乙ではちがう場所でした。

甲の場合

- ・ かつてある文豪が宿泊したまま姿を消したという温泉宿
（ただし廃墟ではない）を舞台にした物語
- ・ 三人称のまま

乙の場合

- ・ 粗大ごみに出されていたゲーミングチェアに座り込んだ猫
- ・ それを見つけた犬の視点で語られる

今度は、掲載小説を例にとりましょう

『双子の糸の物語』

甲／乙どちらを選んだとしても、結末は一つ。変わってくるのは構成です。甲の場合、三人称の視点で、章ごとに、クレーン操縦者→タワーマンションの庭の管理人→小学生……と、メインキャラクターが変わるオムニバスで、風景が流れるように物語が展開します。

一方、乙は、白い毛糸を語り手に据え、様々な人間や出来事が一人称で思い出されるというスタイル。

WEBサイトに掲載しているのは乙です。同じ結末でも見えるのは違う景色で、登場するキャラクターの一部が異なります。

『Origin』 甲／乙

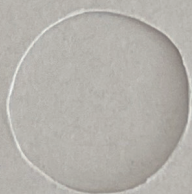
掲載している通り二つの結末があります。元々、乙寄りの物語ですが、違いが感じられるように甲／乙、両方の結末を掲載しています。この作品は文体や設定、登場人物、中盤までの展開は甲乙で変わらず、終盤～結末のみが変わるタイプです。実際に読んで印象の違いを感じてみてください。

※甲乙どちらを選択しても、実際の小説は縦書き・左開きです。
乙の「横書き」は、あくまでもテキストのイメージです。

この甲乙のテイスト選択は、どこかにギャンブル性を混ぜ込みたいという気持ちもあり取り入れました。

そもそも、自分が読みたいと思う物語を誰かに依頼する時点で賭け。この賭けは、それなりの覚悟が必要な、ヒリヒリするもの。「これにお金を払ってよいのだろうか」「書けるだろうか」とお互いの感性、技量、判断力を問われるもの。けれど、買い物にヒリヒリしすぎるとギスギスしかねないので、そこにもう一滴、もっとたゆつとした「なんとなく選んだ要素」が落下することで、読者も、書き手も、さらなる意外性や偶然性を楽しめたらと考えました。絵具を一滴たらし、どんな柄や色になるかを楽しむ。「楽しい自己責任」そんなイメージです。

着飾らない時代になったからといって物語は自由です。お引き受けできるかどうかはまた別の話ですが、文章は耽美、冒涇なんでもあり。どうぞ、あなたの物語に甲／乙のテイストを重ねてみてください。



コッコ文庫は物語をセミオーダーできる店。けれど、結末を指定することはできない。あなたの一部から生まれた物語なのに、きっと、あなたが想像したのとは別のものが届く。あなたの思い通りにはならない。

誰かと誰かが手を組む以上、それは当然のことだ。「違い」に過度に反応してしまつては面白い。予定不調和を大いに味わって欲しいし、あるいは思いがけない一致に驚いてほしい。ところが、そんな絶対的な不確定要素がある当店にも、一つだけ、絶対にあなたの思い通りにできることがある。それは、あなたが苦手な言葉や場面を小説に持ち込まないことだ。苦手な言葉を別の言葉に置き換えることもできる。これを当店では「禁則」オプションと呼んでいる。個人から直接依頼を受けて物語を書き、本にして届けるというアイディアが浮かんだとき、真っ先に思いついたのがこのオプションだった。

私のキラキラ時代は、最高の買い物をした翌年に幕を下ろした。「ぞくっ」として、キラッとして、その次はぬらぬらとした時代でした」とでも言えたら少しは恰好がつくのかもしれないが、三〇歳になった私に訪れたのは空白だった。

十年続くことになる空白の時代、そのはじまりの数年間、私はほとんど書店へ行かなかった。本だけではない。音楽を聴くことも、映画もテレビも、エレベーターに貼っている広告さえも受けつけなくなった。

言葉がこわくなったのだ。

仕事と家の往復だけで毎日をやり過ごす。仕事がない休日がこわい。何をしたらよいのか、どこにいたら心が乱れないのか、見当がつかない。言葉はそこにも、ここにも、どこにでも、自分に関係なくとも漂っている。それでいて私は空白だ。一マスも埋まらない。もちろん職場にだって言葉は溢れていたが、感情を乱してはいけない場所がひとつあることで救われていた。私がとりわけ反応したのは「つくられた」言葉だった。所謂フィクションだ。あるとき私は、想像していたことが現実になるこわさを知った。すると、どんなフィクションも受けつけなくなった。どれも滑稽で嘘つきで、受け入れがたいものになった。「あなたの想像はそんなものですか」と撥ねつけ、「フィクションなら現実なんて軽く打ちのめせよ」と喚いた。

その後、時間をかけて言葉を取り戻した私だが、今でも目にしたくない、耳にしたくない言葉がある。ここでは「○○○○」と伏字にしておこう。どんなに嫌でも、毎日のようにネットやテレビ、フィクションでもノンフィクションでも、そこかしこで○○○○を見聞きする。突然それに出くわすと動悸がするから、気配を感じたら多分出て来ると構える癖が身についている。無防備にそれにぶち当たったときの衝撃は当事者にしかわからない。

あなたにもそれがあるかもしれない。

コッコ文庫はその不安を取り除きたいと思った。あなたに「伏字」があるならば、それを意識することなく、安心できる場所をつくりたい。

コッコ文庫へ詳細を教える必要はない。避けるべき言葉や場面だけ、あたなの負担にならない程度に知らせてほしい。問い合わせフォームにもオプションを入力する欄がある。もちろん

手紙で伝えていただけでも構わないが、どうぞ無理のない範囲にとどめていただきたい。

昔の私には〇〇〇〇はなかった。寧ろ、表現にタブーを設けることはおかしいという考えだったし、それは今も変わっていない。だからこの禁則オプシオンを思いついたものの、採用してよいのだろうか悩んだ。

不特定多数が読者の場合、こうしたタブーを設けることは適切ではない。なにかを伝える必要性が作家にあるならば、読者がどう受け止めるかを考えて表現を怯む必要はない。書き手としては書くだけだし、読者としてはどうぞ書いてくれと願う。

けれどコッコ文庫は違う。あなたがわざわざ依頼をしてくれる。そこでタブーを設けることは適切でこそあれ、逃げではない。特定の言葉や場面を避けるというのは、個と個でつくる本だからこそ実現できることだ。

ちなみに禁則オプションを使って、こんな依頼も可能だ。

「いつもはデジタルに浸かりすぎているので、スマホ、メール、SNSを登場させないでほしい」
物語の舞台が現代なら、ちょっと工夫が必要だ。

禁則オプションを利用して、料金は変わらない。あなたの良いように活用してほしい。

さて、空白時代がコッコ文庫にプレゼントしてくれたものがもう一つある。それはシンプルな製本だ。

空白の時代に入っすぐ、私は持っていた本のほとんどを捨てた。ちょっと珍しいハードカバーや写真集も、エッセイも小説も専門書も漫画も、十冊に満たない本を残しすべて捨てた。売ったのではなくごみとして捨てた。残した本が何だったかも今となつては覚えていない。選別基準などなかったと思う。

私は本や書店が好きだが、その崇拜者ではなく収集癖もない。とはいえ本は幼い頃から私の相棒だった。けれど、辛いとき本は助けてはくれず、言葉は邪魔だった。優しかろうが厳しかろうが、音楽にのせた言葉の断片さえも邪魔だった。

今でも捨てた本を読みたいなと思ひ出すことはある。が、当時の私には重たい本棚を抱える余裕などなかった。どんなに思ひ入れがあらうと、辛いときは自分の身以外捨ててしまうより仕方がないと知った。

そんな思ひから、コック文庫の本は処分しやすいうに、簡易な作りになっている。極小ビジネスだからコスト面も考慮している。もちろん、長年大切に保管しますと言われたら嬉しいから上製本も考えた。が、やめた。耐久性は劣る。その代わり薄くて軽いから、本棚のちよつとした隙間に紛れ込ませることができ、オーダー品だとデカイ顔をするでもない。

それにコック文庫の本は一般に流通する本ではないため、手放そうと思つても古本としては値がつかないだろう。つまり手放すということは、ごみとして捨てることになる。そこで捨てることを前提として、どのような製本がよいのか検討した。

結果は次のとおり。

引き破るなら怪我せずに済むように。主人公になりきって、ちぎった紙を風にのせても綺麗に舞うように、ごみは少なく済むように、シンプルな製本で、表紙もそれほど厚みを出さず、ただし本文用紙とは質感の異なる紙を選び、その代わり、オリジナルの箱に入れてお届けする。お住いの地域によっては雑がみとして処分することも可能だ。

オーダーするからには、手が込んだ製本や装丁を求める人が多いだろう。なぜならオーダー品にはお金はもちろん、思いが込められている。けれどコッコ文庫の本は敢えて脆く^{もろ}つくる。物には思いが宿るという。とりわけ、自分で何かをつくることや、既製品ではなくオーダーするということは、普通に購入するよりも、その物に対して深い思いを抱くだろう。だから私はつくるのが好きだ。一方で、つくることはこわいことだとも思っている。わざわざコッコ文庫に本を依頼するということはそれなりの思いがあつてのことかもしれない。思いの深さは執着心と紙一重だ。物に対する思いは素敵だが、しかし私たちの状況や感情はうつろう。その時が来たら、無理に抱えずに手放してほしい。いつまでも抱え込むことはせず、次の展開へ突入できるように、敢えて質量の小さな本を届けたい。

ちなみに電子書籍を導入しない理由は次のとおり。

第一に、一点物を電子データで届けるのはあまりに味気ない。第二に、紙でも軽くて薄いので収納スペースに困らない。必要がなくなったときには、物なので「捨てた」という手応えがある。

そしてもうひとつ。もし遙か未来、地球が消える瞬間、あなたが読み終えた本の一頁が宇宙空間を漂って、どこかの生命体が見つけたとしよう。謎の形の羅列、ひらひら舞う断片。もしその生命体の一部から全体を再生できる能力があったとしたらどうなるだろう。あるいはかれらが言語というものを解読できるとしたら？ 電子データならたやすく解読されてしまうように思うのだ。だって地球外生命体なんだから。でも安いインキの欠片ならば、そう上手くはゆかないのではないか。その方が解読する側もされる側もちょっと楽しいような気がする。だって地球外の生命体だよ。簡単に解読できるようじゃ、相手にされないって。

コッコ文庫の本にはそうしたかすかなロマンも込められている。

コッコ文庫の製本・装幀

コッコ文庫の本は、装幀も製本もすべて店主一人が手掛けています。

■本および口の仕様

- ・本体 - 幅：約 13cm、高さ：約 21cm
- ・口 - 幅：13.2cm、高さ：21cm、
奥行：1.0 ～ 1.5cm程度（作品によって異なります）
- ・製本の種類 - 糸かがり綴じ
例：コプト綴じ、クロスとチェーンステッチの組合せ
（作品の厚みや雰囲気合った綴じ方を当店で選択します）
- ・製本 - 物語ごとに完全オリジナル

■物語の長さ：約 25,000 字～最大 60,000 字程度まで

（参考：・『双子の糸の物語』は約 26,000 字

- ・『origin』甲・乙は約 60,000 字で甲の方が長いです）

以下、ご参考まで（青空文庫にて確認）

- ・太宰治『走れメロス』：約 10,000 字
- ・坂口安吾『夜長姫と耳男』：約 28,000 字
- ・谷崎潤一郎『春琴抄』：約 52,000 字

■当店の本の注意点

- ・安くはない
- ・流通している本に比べるとインクの耐水性、耐光性、濃さが弱い
- ・専門業者による印刷、製本ではなく、手作業のためサイズにブレあり

一番の弱みはインクです。これはぜひとも改善したい点ですが、現時点では耐性よりも価格を抑えられる方を優先しています。表紙、本文含め、濡れた手で触るとインクが溶ける可能性があります。お気をつけください。

■上製本や業者による化粧箱をご希望の場合

適切な印刷・製本会社に依頼することになるため、追加料金をいただきます。また、納期がかかる場合があります。ご希望の場合は、予算の目安もあわせて、ご相談ください。

■修理

糸綴じは、辞書など厚みがある本にもふさわしい、強度に優れた綴じ方です。当店の本も、通常の読書の範囲内では、糸が切れたり、解けたりする可能性は低いです。ハサミで糸を切る、またはページを引きちぎるようなことをしない限り、本がバラバラになることはまずありません。

とは言え、綴じ方が弱かった、アクシデントがあったなどの理由で、本がバラバラになった場合は、修理が可能です。詳細は当店までメールでお問合せください。

なお、修理の際は、実物の状況を確認するため、□と本体一式を当店へ郵送いただく必要がございます。

※本体、□を問わず、経年劣化や通常の使用による摩耗等は修理の対象外です。

コッコ文庫の価格設定

■基本価格 20,090 円（送料込・税込）

通常の製本であれば、本文の長さを問わず（ただし約25,000字～60,000字以内）、上記価格です。

※上製本や複数部数を希望する場合は追加料金が発生します。

製本や装丁をシンプルにすることで、できる限り「書くこと」「物語」の対価をいただけるように価格を設定しています。

一般的に文章を書いて得られる報酬は、一文字〇円で計算されることもあれば、執筆に要した時間数×時給単価という場合もあります。

仮に一文字一円として、『双子の糸の物語』（約 26,000 字）の場合、原稿料は約 26,000 円です。それ以外に、デザインにかかった時間や製本、□の作成、紙やインク代といった実費が加わり、30,000 円を越えます。

また、文章を書くという行為は、「増やす」ではなく「減らす」ことが少なくありません。30,000 字の原稿を 26,000 字に短くした場合、その対価は 30,000 で計算すればよいのか、それとも 26,000 にすべきか、判断に迷います。完成時の原稿の字数で計算される方が多い印象ですが、26,000 円にせよ、30,000 円にせよ、コッコ文庫の本一冊に対してその金額を払う人はいないでしょう。

では、時間数×単価の方が良いかというと、そうでもありません。

仮に最低賃金（2026 年 9 月時点の全国平均金額の 1,177 円）を単価に設定して、9時間未満に全作業を終えたとすれば、10,000 円を切ることができます。が、9時間では完成しません。しかも、完成までに要した時間を知っているのは私だけ。過少、過大報告し放題です。

書くことに限らず、つくるという行為は、時間に制限なくどこまでも出来てしまうというこわさがあります。ずーっと仕事しているのに対価が少ないというジレンマも起こりえる。しかもつくる側はそれを受け入れてしまう可能性が高い。一方で、質は低いのに高すぎるということもありえます。

特に文章は厄介です。たとえトイレットペーパーに物語を書いて水に流しても、高級和紙に特殊印刷して製本しても、電子書籍としてデータ化しても、書くことに費やした時間とエネルギーは同じです。一般の出版社であれば、作家、ブックデザイナー、紙、印刷とそれぞれに適切な予算を割り当てるのだと思いますが、極小ビジネスで、しかもひとつの物語につき一冊しか販売しない当店では、紙、印刷技法、□とハード面を整えれば整えるほど、書くことに配分されるお金は少なくなります。

そのためシンプルな製本で、耐久性や精密さは劣りますが、できる限りこだわった紙で本をお届けします。

こんな商売、続くのだろうか?と笑ってしまうことがよくあります。けれど依頼がある限り書き続けたい。そんなジレンマを解消するため、実際にご依頼いただく方へ、コッコ文庫からご相談があります。

ご相談

コッコ文庫では、皆さんが選ばなかった方のテイスト、つまり「もうひとつの物語」の何篇かを収録した短篇集を出版したいと考えています。それを一般に販売してこの店を続けるのに必要な報酬を補うという試みです。

私はあっちの道も散歩したい。それはあなたも同じかもしれません。

また、依頼には至らなくとも、個と個で生まれる本がどんなものか、気になっている人が読んでくれる可能性もあります。広く流通させるとなれば、多くの方に手にとっていただきやすい価格に設定できます。コッコ文庫に2回依頼するよりずっとお得。

いかがでしょう？ ちょっと気になりませんか？

お客様のなかには、選ばなかった方の物語であっても掲載を望まない方や、もうひとつの物語は知りたくないという方もいらっしゃると思います。

そこで、実際にご依頼いただいた方には受注後にアンケートをお送りいたします。ぜひ「もうひとつの物語」掲載についてのご意見をお聞かせください。

アンケートは右のようなもの考えています。

実際に短篇集を出版する場合には、製作に取り掛かる前に、あらためて掲載の可否を個別に確認させていただく予定です。

アンケート（サンプル）

Q1 あなたの「もうひとつの物語」を収録することを、

- ☐ 許可する
☐ 許可しない

以下はQ1で「許可する」を選んだ場合のみご回答ください

Q2 あなたの依頼内容を短編集に記載して構いませんか？

- ☐ 許可する
☐ 許可しない

Q3 あなたの物語（コッコ文庫がお届けした小説）の概要を
短編集に記載して構いませんか？

- ☐ 許可する
☐ 許可しないにとどめます)

Q4 依頼者としてあなたのネーム（本名は不可）を、

- ☐ 掲載する（希望ネーム： ）
☐ 掲載しない

こんな感じでささやかな記載に
とどめる予定です →

『湯けむりと謎の煙管』(甲)
ユトリ呂様からのご依頼
・ご依頼内容
犬と猫が家出し、無事戻って来るけれど、人知れずどこで大冒険して
いたというちょっと不思議な話。
・乙を選択（乙の概要）
乙では、ゲームの世界に入り込んだ
犬猫が大冒険を繰り広げます。

コッコ文庫とAI

AI が身近になっています。わずかなアイデアを入力するだけで、AI が物語のプロットやキャラクターを提案してくれます。

もともと私は AI に関心がありませんでした。が、2020 年以降、働くなかでこの技術に触れる機会が増えました。現在も、仕事で AI の調整をすることがあります。ですが、私にとって AI は頼もしい存在ではありません。これは 2020 年～現在まで一貫して変わらない考えですが、AI が力を発揮するのは集団においてだと私は思います。

コッコ文庫は私ひとりの店です。考えるのも、書くのもメールの返信も、私に対応します。文章やデザインには否が応でも似たような雰囲気が高い、遅かろうと早かろうと自分の速度で物事は流れます。私は自分で考え、手を動かし、判断するしかなく、時間の配分も勝手に決めることができるので、AI を取り入れても旨味がありません。寧ろ、プロンプトを入力する時間が無駄です。

一方、組織は様々な人で成り立っています。人によって得意不得意があり、上からのお達しで方針が二転三転し、担当者によって印象が左右され、業務速度は一定ではありません。それは、業務上の課題や残業時間の差、会社に対するクレーム等として現れます。品質の維持や調整、比較分析が得意な AI は、サービスを均一にし、効率化します。

今でこそこんな店をはじめた私ですが、これまで働いてきた年数のほとんどを創作と無関係な業界で過ごしてきました。創作より遥かに AI を必要とする仕事があることを知っています。

そんなわけで、コッコ文庫本館では、物語の構想、執筆、デザイン、その他すべてにおいて、AIは一切使用しません。これには生成AIだけでなく、予測AI、会話AI等のあらゆるAIを含みます。WEBサイトに掲載している本館のコンテンツのなかにAIで生成したものはありません。

人間が作るものに「あたたかみがある」と言うつもりはありません。AIの仕組みを考えると、一個人あるいは一対一のビジネスで利用するには過ぎた技術だという意見です。また、率直に言えばAIに興味がありません。私にとっては、創作以外の仕事で使うものです。

AIは使用しませんが、いつか素敵な絵や写真、音楽等、異なる分野の作家さんと組んでみたいという願望はあります。私に必要なのはAIではなく人間です。

※別館のAI活用についてはこちら

空白が訪れて四年を過ぎた頃、私は再び小説を書き始め、読書を再開した。

と、ここまで、甲だ乙だオプションだと、私が「書き手」であること前提で話を進めてきたが、どういう書き手で経歴なのかまったく触れてこなかったことに、この章を書きはじめてようやく気がついた。

コッコ文庫を判断するうえで、私の経歴が全くの役立たずとは思わない。ページを遡って、二、三箇所を書くエピソードを滑り込ませれば事足りるだろう。けれど、せっかく特別な考えもなしに触れなかったのだから、このまま続けることにする。

文章力を確認したければこのエッセイや別館のサンプルを、小説を書く能力や文体なら掲載小説二篇を読んでご判断いただきたい。また、経歴を知りたければ、別館の情報とこのエッセイから、若干ではあるが推察いただくことが可能だ。書いたところで、「ああ、そうなのね」という程度のしがない経歴でしかない。余計な情報は少ない方があなたの判断が鈍らないと思う。

ついでに、すでに書き終えていた、空白時代後半からこの店を立ち上げるまでの経緯も省くことにした。

肝心なのは、あなたはどんな物語を読みたいのか。そしてそれはどこで手に入るのかということだ。

広く流通している本を買う方が安心なのはわかりきっている。ネットでも店頭でも、たくさん本のなかから、読みたい本を探す方が簡単だし、出費だって抑えられる。出版社や編集者

を通さず書き手へ依頼するなんて怖い。サイトに色々掲載していると云われたって、客観的な評価はどこにもない。それに自分の審美眼は信用ならない。私ならそう思う。

だから当然、つくり手となる私も怖い。だって、百人の読者がいたら、一人くらい喜んでくれる人がいるかもしれない。けれど一対一は話が違う。それに、面倒な本の買い方は、私にとっては面倒な本の売り方だ。それなのに、どうしてこんな商売をはじめたのと聞かれたら、面白そうだから、このつくり方が私にとっては自然だから、としか答えようがない。それに自分の感覚を信じていて、あなたの感性にも興味があるからだ。

はじめて書店へ行ったとき、本を知ったとき、小説を読み始めたとき、わたしたちに一体どれくらいの情報があつただろう。並ぶ表紙と背表紙。数行のあらすじ。文庫本巻末の新刊本一覧や挟まれているチラシ。新聞や電車の広告。インターネットが登場する前は、友達から勧められたり、家族から押しつけられたり、書評でも読んだりしないかぎり自分の感覚で本を選ぶしかなかった。コッコ文庫はそれと少しも変わらない。違うのは、あなた自身が物語の一端を担っているということ。それでいて、どんな代物か読み始めるまでわからないということ。怯えて待つというのも乙なもの。

さあ、面倒な本の買い方はこれでおしまい。あとはあなたの行動次第だ。書店に行くでも、初回問い合わせフォームを送信するでも、自分で書くでもなんでもあり。

ちなみに私はココにいる。物語はいつでも生まれるのを待っている。あなたのなかで。私のなかで。ここ、在庫ゼロのコッコ文庫で。

皆さまからのご依頼、心よりお待ちしております。

面倒な本の買い方

二〇二六年二月二十七日 発行

著 者 菅原侑子

発行所 コッコ文庫

<https://kokko-books.com>

装丁
DTP
製本
コッコ文庫

© 菅原侑子 2026



